分散会１

司会者　　仲村　康子
記録者　　今永　泰生
会場責任者　宇都宮　晋

北海道占冠村教育委員会

藤本　武　氏

占冠中央小学校コミュニティ・スクール（以下 CS）の取組

平成 26 年５月に占冠村中央小学校が初の CS となり、平成 28 年度からは村内３校の小中学校が CS に指定されることとなった。現在、学校地域支援本部を中心として、放課後の見守り、読み聞かせ、山菜料理教室などのボランティア活動を実施している。また、北海道大学、星のリゾートトマム、占冠村で三者連携協定を結び、「雪の学校」、「川の学校」といったプログラムも行っている。さらには、村内の学校間でのテレビ会議システムによる遠隔授業の取組も始めている。

今後はこのような取組を進めながら、義務教育学校や小中一貫を推進し、占冠学園構想の実現に向けた準備をしていく予定である。

広島県尾道市　NPO おのみち寺子屋

加良　莉夏　氏
金尾　百恵　氏

第 14 回人間力育成塾

８月上旬に小学４年生から６年生までの 100 名が尾道市内 100km を４泊５日で歩き抜く事業（＝おの 100 挑戦隊～感動創造の旅～）を活動のメインとしている。教育目標は出会い、挑戦、忍耐力、感謝、感動である。この事業に向けて、学生はコミュニケーション・シミュレーション能力の開発や事前ルートの確認など１年間を通して準備を行っている。また、銀山街道の整備（尾道～石見銀山）や保護者参加事前研修会を行うことで、地域や家庭との協働体制も生まれてきている。小学生の時のこの事業の参加者がボランティア研修生、高校生スタッフ、学生スタッフ、実行スタッフの役割を担うなど、役割の好循環ができあがってきており、持続可能な社会へつながっていくと考えている。

プロジェクト地球っ子ひろば（愛媛県新居浜市）

射手　建雄　氏

子どもと親の自然体験ファーム

新居浜市大生院の耕作放棄地を復活させた畑と森で、出会う生きものたちと直接楽しく触れ合い、自然に親しみ、自然を知り、自然を大切にする心を育む機会を親と子どもたちに提供しているボランティア団体です。自然を直接体験するゲームを取り入れたプログラムを設定し、参加者が共に苦労しながら楽しく農作業や農産物の加工作業が体験できるような工夫を行い、活動から、自己と自然との関わりに気付かせ、命あるものが共に自然の中で生きていくことの大切さを感じさせようとこころがけています。今後は、米づくりと森づくりをあわせた活動や、他の活動グループとの協働・相互支援、次世代が自然に配慮した開発を担った際の糧となるような自然体験活動に取り組んでいきます。

質疑応答

占冠中央小学校 CS の取組

Q1　地域が高齢化しているが、子どもたちの笑顔で大人たちも元気になっている。高齢者たちからはどのような声があがっているのか？

→　CS を作る際に高齢者たちを巻き込み（高齢者大学）、高齢者の意見をもとに、活動が選定された。「学校から地域」の流れが「地域から学校」に転換した。

Q2　長期休業中の学生による宿題等のサポートはどのようなものか？

→　期間は３日間、短期集中で宿題を終わらせる。高齢者と大学生との連携も深まった。

Q3　多くの方と連携するうえで、橋渡しする方法は？

→　地域コーディネーターや教育委員会などが行う。地域から学校に直接行く場合もある。ただし、無理にお願いするのではなく自然な流れでの活動となるように意識している。CS の取組を通して「つながり」の大切さを実感している。

第 14 回人間力育成塾

Q1　小学生時に体験した子が何人くらいスタッフとして参加しているのか？

→　過去に歩いた子たちに手紙を送っている。今年度は中学生 23 名、高校生６名の参加があった。

Q2　公共施設のプールや体育館を借りる手続きはどのように行っているのか？

→　実行スタッフがあらかじめ許可をとっておく。その後学生スタッフが学校を訪問してあいさつして細かい手続きを行う。

Q3　活動中の食事はどのようにしているのか？

→　学生スタッフが準備している。食中毒には十分配慮するようにしている。

Q4　この事業の対象となる小学校数や児童数はどの程度であるのか？

→　尾道市内の小学生には全員に、市外の小学校には１校につき１通だけ案内を出している。90％は尾道市内の小学生、10％は市外の小学生である。今年度は 100 名参加定員のところ 84 名の小学生が参加した。

Q5　子どもたちの歩く時間はどの程度であるのか？

→　午前６時から途中休憩を入れながら午後３時まで歩くようにしている。

Q6　学生が感じた思いや考えを発表する場はあるのか？（学生の人間教育となっている）

→　フィードフォワードにて発表している。

子どもと親の自然体験ファーム

Q1　子どもたちが集まりにくいとあったが、参加募集はどのように行っているのか？

→　１年を通してインターネットで募集をかけ、そこから拡散している。最初に来た子たちが年間を通して来る場合が多い。学校からの呼びかけはしていない。

Q2　子どもたちにどこまで環境問題に関する考えが伝わっているか

→　この活動で子どもたちには環境問題の話はしない。社会に出たときに思い出せばよいと考えている。想像力がある人が育ってほしい。

Q3　保護者の方は完全に参加者となるのか？保護者に目的が伝わっているのか？

→　保護者には目的をしっかりと伝える。来る保護者は子どもに自然体験をさせたいと

いう思いが強い。新居浜地区は転勤族が多いので、その人たちがよく参加する。
Q4　高学年になるにつれて参加者数が減っているとの話があったが、継続的に参加してもらうための手立ては行っているのか？
→　とにかく楽しい活動を準備する。しかし、危険が伴うので親子参加が原則であること、スポーツ少年団の活動が優先されることから、高学年の参加がどうしても減ってきてしまう。

全体での話し合い・フリートーク・質疑応答など

○　各事業に父親が集まらない理由はあるのか？
→　やはり父親は休みたい。幼児っぽい遊びは控えめになるのかもしれない。
→　父親を本気にさせるような、父親が必要とされるような内容を計画してはどうか。
→　愛媛県では愛護班・子ども会といったものがある。大人自身が楽しまなければ、子どもも楽しまない。大人も子どもも満足するような活動を考える必要がある。
○　学年に応じて遊びへの取り組み方が異なってくる。温度差を埋めるような活動を考える必要がある。
→　１番小さい子に合わせて活動を考えなければならない。下級生から上級生までを楽しませることは難しい
○　いぬねこの会の活動紹介（発足して２０年）。動物愛護を通じた社会貢献活動を行っている。自分の命、友達の命、動物の命を大切にする。
→　自分の娘が不登校になった時　柴犬を飼った。犬小屋にいって寄り添って寝るように。動物の温もりを感じることで学校に行けるようになった。動物には不思議な力があるのだと思う。
○　高齢者と子どもたちとの関わりを深めていくためにどのような取組があるのか？
→　もっと裾野を広げていきたい。保育所とデイサービスが一緒になっていくのでは？
→　まず小学生を行かせ、そこで働いている様子などを見てもらう。施設の人たちを学芸会などに招待する。
→　高齢者は小さい子たちと接したいと思っている。高齢者に授業をしてもらう。戦後の話に高学年は興味をもつ。高齢者は話をしたがっている。
→　公民館に高齢者を呼んで昔遊びのブースを作り、スタンプラリーを行っている。しかし、感染症や交通手段などの課題もある。
→　高齢者大学を通したり行政区の回覧板を活用したりして、高齢者へ連絡をする。
占冠村は人口が少ないので、子どもたちの名前も全員知っている。
今、怒る高齢者がいない。悪さをしても怒る人がいない。
○　認定NPO法人に取り組もうとしている団体はあるのか？
→　いぬねこの会は四国で１番にとった。国税庁長官の許可がいる。寄付金を増やそうとすることがねらいではなく、社会的信用を増やしていこうと考えた。
○　子どもが変わったと感じる瞬間は？
→　自閉症の子が自然体験をすることで社交的になる、話をするようになる。生き物に何も触れなかった子が生き物に触れるようになる。触って感じることが大切。
→　別の長距離徒歩でリタイアを促した際の子どもの言葉「前の 80 キロが０になるじゃないですか」→　苦労した分、生まれてくることがある。

分散会２

司会者　　兵頭　智
記録者　　森口　朝子
会場責任者　遠藤　敏朗

秋田県北秋田市生涯学習課

阿仁鉱山（やま）交流プロジェクト～愛媛県立新居浜高等学校ユネスコ部を迎えて～

松田　淳子　氏

少子高齢化が心配されている秋田県だが、地域をつないでいくのは子どもたちなのではないかと考え、地域と子どもたちをつなぐことを大切なことと考えている。阿仁合小学校（全校 31 名）の総合の学習の時間に、ふるさとを知る学習として「小学生による観光ガイド」をしようと平成 25 年から自発的に活動を進めてきた。平成 28 年 7 月 23 日には、「新居浜南高校ユネスコ部」の生徒のガイドを務めるなどの交流会を実施した。また、「秋田大学海外鉱業研究会」の学生との交流も図った。ガイドの活動として、年間 5～６回観光ガイド体験を実施した。大人の方々に喜んでもらっていることが自信に変わり、ふるさとへの愛着心が強まった。そして、バス会社からガイドの指導を受けることなどで自発性も高まり、街のよさに気付くことができた。さらには、大人の意識も変わり学校と地域との絆が深まった。これらの活動は、北秋田市と新居浜市との夢の架け橋ともなるプロジェクトとなった。

静岡県牧之原市政策協働部地域創生課

地域と高校生との対話による学び合いの場のコンファレンス

松井　工　氏

これまで「地域の絆づくり事業」を実施するなどいろいろな事業を展開してきた。それらの事業から見えてきた課題を解決するために、多様な人との「対話の場」を作り、市民ファシリテーターの育成に取り組んでいる。多彩な講師陣を招いて学校の会議室で高校生や大人を対象に、ファシリテーション研修を実施している。グラフィックファシリテーションという絵で会議を記録するという手法を用いて、視覚的に話合いのときの気持ちまで分かるようにしている。また、「平成 28 年度地域リーダー育成プロジェクト」として、『地域に誇りをもつ』などのねらいをもって、５回の学びあいの場を設けた。大人と高校生が一緒になって地域課題の解決や地域に愛着を持つ人材を育成するための対話型ワークショップを行い、高校との協働による地域リーダーの育成を目指している。

白井歌声喫茶グループ(愛媛県新居浜市)

高齢者の生きがいと健全な子ども育成の創出

近田　浩　氏

平均年齢 78 歳（最高齢 92 歳）29 名で構成している。白井自治会の福祉部の活動は年間５回の行事（学習会など）を実施しているが、年５回では少ないという声が聞かれたため、アンケート調査を実施した。アンケート結果から歌の好きな人が多いことが分かり、歌を歌ったり聞いたりすることは認知症予防にもよいということで平成 23 年２月に歌声喫茶グループを発足した。市生涯大学のミュージックセラピーの受講に合わせて行った。使用場所は自治会館とした。自治会からの助成金は出なかったため、参加費を１回 100 円徴収した。福祉部の活動と違い役員がいないため、輪番制で行い、年間 30～40 回も自主的に運営している。歌声や学習会を中心に健康づくりとして「にいはまげんき体操」やヨガ、サロン活動としてお手玉や折り紙などを行っている。成果発表の場として時にはボランティアに出掛けて交流をはかっている、これは高齢者の介護予防・引きこもり・孤立防止の歯止めにもなっている。子どもたちには高齢者が元気に頑張っている姿をもっと見てもらい、子どもへの情操教育や健全育成に役立ちたい。合わせて地域の活性化につなげたい。出来れば新居浜市と言えば「にいはまげんき体操」と言われる市にしたい。

秋田県北秋田市生涯学習課の実践について

【表記について】
質問「Q」　回答「A」　感想「感」　司会者の発言「司」

Q　秋田では３つの学校がボランティアガイドをされているが地域支援本部と絡めて活動を進めているのか、学校のほうから自主的に進めているのか。

A　北秋田市では、阿仁ぶらぶらガイドの方がコーディネーターをされている。学校からの要請に合わせた人材を学校に送っている。その後、学んだ成果を発表する場として子どもたちがガイドをすることになった。ガイドをすることがねらいで進めていったのではない。

Q　他の３校も同様か。

A　北秋田市では、伊勢堂岱縄文館も含め、大人の観光ガイドは 40 人ほどいる。子どもたちがガイドをするために、退職された教員の方や大人のガイドの方などが協力して、夏休みなどを利用してガイドを土日限定などで実施している。

Q　人口に影響はあるか。

A　学校は地域のための学校ということで地域の願いを受けながら取り組んでいるが、あまり人口の変化はない。しかし、移住と定住などについて発信をするなど大人が動き始めている。「Ｇちゃんサミット」なども行ない、15 年ぶりにお祭りを復活させるなど地域づくりを始めた。また、都会の子どもたちとの阿仁マタギ体験交流を行うなど、民間団体や企業と連携が強まり、子どもたちの頑張りが引き金となった良いサイクルが生み出されている。地域ぐるみの学習を進めることにより、大人の気持ちを動かすことができると考えている。学校と社会教育が一つになるためにも、企業や学生との連携を重視しながら、見生の大人の育成を図りたい。

静岡県牧之原市政策協働部地域創生課の実践について

Q　高校の県の教育委員会から何か言われることはないのか。

A　県の教育委員会の課長さんに事業を紹介したところ、話を聞いてもらう体制を作ってもらうことができた。

Q　周知方法はどのようにしているのか。また、どのような高校生が参加しているのか。生徒会役員などの参加を呼びかけたのか。人数の制限をしたのか。

A　榛原高校は、昨年度は半強制のようだったが、今年度は募集をかけたらたくさんの希望者がいた。他の高校は部活動や生徒会などでリーダー格の生徒や３年生全てなど学校によって異なる。

Q　人材育成や今後の実践について。地域の中に入っていくのか。

A　教育委員会が立ち入れないところまで今回の事業で学校ともつながることができた。地域の人々の人材育成を目指して、（高校生や大人を対象とした）市民ファシリテーターの実践の場を充実させている。それは、学生の育成にもつながっている。これからも高校に入り込んでいくのが課題である。実践の場がたくさんある。地域の絆づくり事業で、地域の課題を見つけて解決していく。事業に高校生が入ってきてくれたら今回の事業が実を結んでいくのではないかと思うが、自分たちが強制的に連れて行くことはしない。

Q　ファシリテーターは自分の地域で活動しているのか。

A　自分の地域で活動をしている。地域にファシリテーターがいないときは他地域の人が応援している。

Q　人集めはどうしているのか。

A　地区長さんにお願いしている。自主的な人は少ないので、意欲的な人に声を掛けていく。

Q　別の活動の講師が豪華だったが、この事業の講師もされているのか。

A　先ほどの講師陣は今回の事業の講師である。別の事業では育ってきた高校生が運営を学ぶなど事業が深まりをみせている。

Ｑ　コンファレンスに市役所の職員は入らないのか。すごく成長することが出来る場なので、市の職員が新人研修などで入ることにより本気の話合いになるのではないか。

Ａ　現在は基本的には入っていない。関わってもらってその人が発信するのがよいが、他にも公共施設マネジメントの問題など地域のモチベーションを高める活動があるので、なかなか難しい。

感　市長も活動に参加しているし、本気の場に高校生を入れてあげて導いてあげたらよいのではないか。大学教員としても、こういう高校生に大学に来て欲しい。すばらしい活動である。

Ｑ　積極的な先生なら参加するが、参加しない場合もあるのではないか。学校自体に断られることはないのか。

Ａ　一番の進学校も参加している。学校に一人でも熱い先生がいれば出来る。一番の進学校が参加出来たことで他の学校も取り組むことが出来ることが分かった。

Ｑ　新居浜市でも頑張った先生がいたから出来た。頑張った先生が入ればよいが、現実的には難しいところがあるのではないか。頑張る先生の人材育成のためには、どうしたらよいか。

Ａ　各学校に必ずやりたいと思う先生はいるが、その人が市とつながるかは難しい。学校全体でやる気をもって他の先生を誘って活動に行くなどしていくと、中心となる人がいなくなっても大丈夫である。

司　自分がどんどん熱くなっていけばやりたいと思う人も出てくるのではないか。

白井歌声喫茶グループの実践について

（にいはま元気体操の様子）

※　まず、全員で「にいはまげんき体操」（体操の最後は新居浜市歌入り体操で持参したマンドリンで伴奏）を実施、次のお手玉体操は、お手玉を一つもって歌に合わせて体を動かした。

感　高齢者の比率が高くなるとあったが、健康であれば高齢者と言われることはない。

Ｑ　「にいはまげんき体操」をラジオ体操の代わりにすればよいのではないか。

Ａ　教育委員会が動いてくれれば可能なのではないか。

感　この体操をゆるきゃらが踊るとか、教育委員会とコラボして出来ればよいのではないか。ラジオ体操秋田バージョンなども実施している。

感　歌声喫茶グループは地区のものだが、広域化してもよいのではないか。自治会から何かをもらっているわけではなく自発的にしていて楽しい会なのでもったいない。

Ｑ　このグループの人が自治会の役員になることはないのか。その時は大変なのではないか。

Ａ　大変だが両立している。この活動は助成金に頼らずボランティア精神でやっている、タクシーを乗り合わせるときなども各人が 100 円ずつ出すなど細かい取り決めをしている。幼稚園に行くときは、手作りのプレゼントを持っていく活動もしている。

　今日は、このような場所で発表まで出来るとは思わなかった。感謝している。昨年、助成金をもらうことも出来て、みんなが非常に喜んだ。トップは言うよりも率先して動くことが大事で、これが自分の健康、信頼にもつながる。リーダーの私は妻の援助が大である。今後、小学校・中学校にも可能ならば、活動の場を広げていきたい。最近、歌声にお手玉を取り入れ練習している。小学校のクラブ活動に出向きボランティアを月 1 回行っている会員もいる。

Ｑ　秋田でも行っているが、いろいろな場所で体操をしてもよいのではないか。

Ａ　様々な交流の場でこれからも「にいはまげんき体操」を普及させていきたいと思います。

分散会３

司　会　者　清家　　卓
記　録　者　上田　　謙
会場責任者　大森　茂樹

福島県会津坂下町

「子どもがふみだす　ふくしま復興体験応援事業」は、東日本大震災後の県教育委員会復興支援事業である。これまでの様々な支援に対して、子どもが主体となって復興に寄与していく社会体験活動である。「避難者を元気に」「一人一人が復興大使」「ふくしま発信」を柱に、様々な活動に取り組んでいる。柳津町立西中学校では、地域のアントレプレナーシップ育成教育（起業家教育）に取り組んでいる。「地域を魅力的にし、地域を活性化するために」をテーマに、観光パンフレットづくり、農産品の栽培・販売、地元温泉の新たな土産物の開発を行っている。その過程で生まれた「ひしストラップ」は大変好評で、地域の民芸品として認知されつつあり、地域の方との連携で、地域の活性化に大いに寄与している。

西中土産　「ひし」

岡山県岡山市立中央公民館

岡山市立中央公民館で実施している「食のソムリエっ子講座」は、小学２～３年生を対象とし、「子ども自身が食に関心をもってもらう」をテーマに開発プログラムとして実施した。核家族化、共働きなどのライフスタイルの変化を踏まえ、子どもが主体ではあるが、「食の大切さ」を通じて、その向こうにいる家庭もターゲットにしている。この講座は、単に食に関する知識や技術だけでなく、食に対して自らが正しい行動ができることを目指している。具体的な到達目標としては、「炊飯し、三角おにぎりが握れること」「煮干しで出汁をとり、豆腐や野菜などの具材を切って、味噌汁をつくれること」など大変ユニークな取組を実施した。また、子どもたちの意識が持続できるよう、定期的にペーパー試験を取り入れ、ソムリエっ子認定を行っている。栄養士や地域の方々などのサポート体制が充実しているのもよい。

重森　しおり　氏

久米ふれあい食堂（愛媛県松山市）

「久米ふれあい食堂」は、孤食対策事業の一環として、久米公民館と地元企業がコラボして実施している取組である。孤食が大きな課題となっている現代、子どもや独居老人を対象に、栄養バランスの取れた食事を提供し、「一人にさせない地域づくり」の意味合いも含まれているこの取組は、今後の地域ネットワークづくりの一助になると考えられる。現在も、独居老人、子ども、ボランティアの週１回のふれあいの場所になっている。運営については、調理手伝い、寄付金、食材提供など、その多くがボランティアで行われている。地域住民はもとより、企業や大学など、この事業の趣旨に賛同していただいたことが大きな要因と考える。今後の課題としては、一部に負担がかからないよう、持続、継続が可能な事業にし、開催場所の増加や施設設備の充実、資金確保なども挙げられる。

分散会内容（質疑応答）

ふくしま復興体験事業・福島復興公民館大学

Ｑ１　関係機関との連携と収益金の用途は？

→総合的な学習の一環として実施し、地域の方々への「ひし」の由来等を訪問調査。その後、生徒がデザインし、独居老人の方が作成するシステムを構築し、文化祭で販売した。地元の観光協会との連携により、地元ホテルや道の駅など、販路を拡大することができた。収益金は、生徒の活動費に還元した。

Ｑ２　中学生と地域や高齢者との交流と今後の取組について

→学校と公民館が隣接しており、公民館が学校と地域をつないでいる。日頃から、様々な交流が可能なのは、公民館が支援コーディネーターの役割をし、地域のキーパーソンを確保したから。学校だけでは教員の確保が難しいので、公民館の協力が不可欠。また、校長がリーダーシップを発揮し、積極的に地域と連携することで、保護者の協力体制もできた。地元の要望が強いので、今後も継続する予定である。

Ｑ３　復興公民館大学について

→異業種のメンバーがいることで様々な視点からプログラムを企画することができる。活動プログラムについては、「体験が第一」と考え、子ども中心のものを企画していく。地域とのつながりが希薄になっているので、公民館を中心に、地域ネットワークの再構築ができればと考えている。

岡山県立岡山市立中央公民館

Ｑ１　中央公民館の役割

→市内３６公民館を統括し、全市的・モデル的な事業も実施している。職員は各公民館内で異動するので、地区館で専門性を発揮できる。事業によっては、スタッフ不足や予算面から地区館に広がらないものもある。各地区館や団体の良さを活かせるようにパッケージ化していくのも今後の課題である。

Ｑ２　スタッフの確保と予算について

→スタッフについては、公民館職員を始め、学校栄養士、シニアソムリエなど、２７名の参加者に対して、５～６名が企画運営を行っている。予算面の問題から、全てがボランティア、有志で参加していただいている。謝金関係を材料費にまわすことで、参加者の負担を減らしている。

Ｑ３　具体的な実習内容

→栄養士のアドバイスを受けながら、一番出汁つくり、野菜の切り方、おにぎりの握り方を身に付けていく。ただ切って塩を振っただけの野菜も、自分で調理することでおいしく感じる。

Ｑ４　地区館に広げていくための課題

→プログラムを細かくしないようにすることで、地区館の良さを取り入れていけるのではないかと思う。スタッフの確保は、地域住民やこの講座を経験した子どもたちが、補助スタッフとして関わっていくとよい。

久米ふれあい食堂

Ｑ１　事業スタートまでの経緯

→地域のつながりが薄くなってきたので、「孤食」をキーワードに、地域ネットワークの再構築をしたかった。久米地区はボランティアなど社会教育に参加している方が多く、人材が確保しやすい地域。企業側としては、フードサービスの栄養管理、介護事業のノウハウを生かしながら、地域貢献を模索していた。

Ｑ２　運営について

→参加者は、子どもから高齢者までと幅が広く、小学生は７～８人、高齢者は５～６人。それらにあったメニューを考えている。毎週木曜日に実施し、火曜日までに事前申込みが必要で、食物アレルギーのない人に限定。参加費は、子どもは無料、大人は１００円。調理スタッフについては、ほとんどがボランティアで、地域の方々や、学校、大学生なども協力していただいている。約３０名を４、５班に分け、ローテーションを組みながら１０名で担当している。参加者、スタッフ分を含め約３５食を調理している。

Ｑ３　食材の確保

→メニューを１か月前に出して、食材の寄付を募る。久米地区は田園地帯ということもあり、多くの方に食材を寄付していただいている。寄付者は、公民館広報に記載している。

Ｑ４　今後の課題

→この事業の意義は大変大きいので、開催場所の拡充、資金面の確保に努めていく必要がある。また、誰でも参加しやすい事業にするためには、送迎や施設のバリアフリーなどのハード面も充実していく必要がある。

最後に

　地域のつながりが希薄になっている現代、地域活動に参加することの意義は大きい。公民館、ＮＰＯ団体、子ども会など、各団体がそれぞれのアプローチで、地域ネットワークの再構築をしていくことが重要となってくる。参加する側も運営する側も、人との交流の中で、生きがいを見つけることができる。社会教育は、家庭教育、学校教育等、様々な教育を「補完」しているのではと考える。

分散会４

司会者　光沖　真治
記録者　橋本　尚子
会場責任者　小笠原貴久

西予市城川町　メニークエスト

藤田　恭裕氏

地域おこし協力隊として西予市城川町へ。合同会社を設立し、城川町土居地区の方々とともに、経済を生み出し、循環させ、地元を活性化させようと取り組んでいる。初めは公民館を拠点に地元の方々と話し合いを重ね、ゆずと栗を使った特産品を作り出した。また、廃校の給食室でモンブランを作り、ネット販売で売る計画も立てている。人口減少が進む町ではあるが、東京で地元の野菜が売れる瞬間を子どもたちに見せたり、売上金で東京散策をしたりするなど、自分たちの活動が東京の人たちに受け入れられる経験をすることで、子どもたちが受け継ぎたいという思いをもてるようにしている。地元で経済を循環させ、経済的に良い方向に進んでいくように、また、地域の方々とともに地元を盛り上げていくという気持ちを忘れずに、これからも会社経営を続けていきたい。

広島県広島市　広島県教育委員会豊かな心育成課

大名　克英氏

子どもの豊かな心を育てることを目的に、全県の５年生を対象に３泊４日の「山・海・島体験活動」を行っている。島の子どもが県北で雪を体験したり、民泊を体験したり、学校で飯盒炊爨をしたりと、内容は多岐に渡って行われている。広島県内全域でバスの送迎を実施したり、看護師派遣制度を設けたりと、活動への協力体制も作られ、現在は広島県内公立小学校の約 80%が実施している。

また、この活動をするにあたって手引きを作り、ねらいの明確化を図った。さらに手引きを使って研修を深めるため、実践発表会を行い、家族からの手紙を発表したり、地元から離れた場所で故郷を見つめ直す活動を発表したりした。子どもたち自身が活動の内容を発表するだけではなく、活動前の自分たちの課題や活動を通して得られたことを発表することで、自分たちの成長について改めて考えることができた。これからも様々な方や組織の協力を得ながら活動を進め、様々なニーズに対応できるようにしていきたいと考えている。

伊予市双海町　読み語り隊

冨田　敏　氏

双海町内の３つの小学校で、朝の読書タイムの際に読み語りをしている。大人１４人で活動をしていたが、私たちもやりたいという子どもたちが現れ、子ども読み語り隊が結成。現在、46 名で活動しており、老人ホーム、施設、保育所などを回って紙芝居を読んでいる。人形劇、デジタル紙芝居など、毎年様々なことにチャレンジしているが、変わらないのは伝承をモチーフにすることである。子どもたち自身で民話を読み取り、紙芝居を作成しているので、最後がハッピーエンドになることもある。また、作画は昔は子どもたちでやっていたが、今は、先生方のご指導を得て紙芝居を作成している。〇〇のために…という意識ではなく、自然と体と心が動く子どもを育てたい、故郷に愛着のある子どもを育てたいという思いで活動している。

質疑応答

メニークエスト

Q1 公民館と地元の組織が関わって、事業が進んでいる。地元の懐が深いのは歴史的なものなのか？

→城川は、公民館を中心とした活動が盛んで、公民館が地元の思いに応えてくれる土壌がある。今までは公民館と住民との近い関係がありながら、一歩踏み出せずにいたが、今回協力隊が入ったことで、どういうことが地域活性化につながるのか、経済活動や福祉、教育など様々な面から話し合うことから始めることができた。時間を要したが、一人一人の住民と意見交換ができる環境が、城川町にはあった。また、ふるさと創生会という公共的な団体があったからこそ、地域にお金を還元するという目的で活動することができるようになった。

Q2 地域おこし協力隊として入ったときに、テーマはあったのか？

→西予市はジオパークに関わることがテーマの宇和町を除き、フリーミッションである。しかし、志を持っていないと、３年がすぐ過ぎていく。また行政側にある程度の受け入れ体制やノウハウがある。協力隊自身が民間出身で、行政の仕組みに慣れたり、地域に溶け込んだりすることができれば、西予市は住みやすい場所である。

Q3 軌道にのってどれくらいか？

→協力隊として西予市に入ってから、この地に定住したいという思いがあり、地元で起業して、地元の方を巻き込んで会社経営をしたいと思っている。しかし任期のあとに起業するのでは難しい。２年目、もしくは３年目に入ったときに立ち上げようと思っていた。公務員と同じ扱いになるので、行政に訴えて、非常勤特別職にしていただいて、起業した。

Q4 目下の課題、そしてこれからの展望は？

→地元が名古屋、前職が東京だったので、名古屋、東京、西予市をつなぎたいという思いがある。今はどうすべきか模索中。また、地元のしきたりや昔からある企業との兼ね合いが難しい。

Q5 地域を活性化するのに重要なことは何か？

→地域の活性化のためには、まずは地域を知ること。意外と地元の方でも知らないことがある。地元を知らない孫世代は、東京のお客様から「どうやって作っているの」と聞かれたときに、子どもたちは答えられない。そうなったとき、地元に帰った時のお手伝いの中身・気持ちが変わる。地元を知ろうとする。子どもたちは、夢中になることを見つけられたらどんどん変わっていく。体験活動を通して、子どもたち自身が何かしようとする。そこをサポートしていきたいと考えている。それが、未来につながる地域活性化につながると考える。

広島県教育委員会

Q1 体験活動で宿泊先が増えたということだが、宿泊先となるまでの経緯は？

→社会教育主事としては、地域の教育力を活用するためにできることはないかと思っているが、学校には活動を進めるためのノウハウは少ないという現状がある。公民館の宿泊ができないという問題は、広島ではなかった。目的がはっきりとしていれば、公民館でも宿泊ができるのではないだろうか。また小規模校ではたくさんの学校が集まって、複数の公民館に泊まるなど、様々なバリエーションがある。

双海町では７泊８日で体験活動を行っている。公民館からは初めはよい答えは得られなかったが、

宿泊可能に。サポートが大事。通学塾の卒業生がサポートに関わってくれている。

Q2 広島県からの予算はいつまで続くのか？

→児童への直接の補助金については，今年度で終了する予定である。教職員の引率旅費等への補助は継続される。各市町が主体となり実施できるようにというねらいがあって、これまで補助が出ていた。民泊であっても、プログラムを見直せば、費用は削減可能である。内容を詰め込み過ぎずに充実した内容にしていけばよい。理解を得て、保護者の方の積み立てをしていくなどの工夫が求められる。

Q3 教育効果を持続するためには、保護者の方の協力も必要なのではないか。家庭への協力依頼はどうしているか？

→自分の教え子を見ていると、体験活動のあとの顔つきが違う。体験する強みをその子に返すことができさえすれば、効果は持続する。子どもたちが自分たちで発表するなどして、意味づけ、価値づけをすることが大事。子どもが成長すれば、保護者の方の理解は得られると考えている。

Q4 活動の活性化のために必要なこととは？

→小学校では、自信をつけることが大事。学校教育では、大人でレールを敷くのではなく、自分で考え、自分で結果を求めていくことが大事だと考えている。北広島町では、地元の子どもたちに向けた民泊も始めた。「地元を知る」ということで、地元の方を講師としてお招きして、体験活動をしたり地元のことを教えてもらったりする。そういった地元の人との触れ合いが愛着心を育てていくと思う。

読み語り隊

Q1 予算がないと活動をするのは難しいと思うのだが、予算はどうなっているのか？

→読み語り隊は５年前からスタートした。紙芝居作りには紙が必要で、その費用は持ち寄りだった。そのままでは幅が広がらないので、助成金をもらっている。子ども夢基金、愛媛新聞がやっているＩウェーブなど…。資金調達のために、絵本やおもちゃを寄付してもらい、それをイベントの際に販売した。

Q2 子どもが紙芝居することのメリットは？

→市町村合併によって、資料はあるが、歴史がリセットされてしまった。子どもたちにはおもしろくないだろう、とおじいちゃん世代もあまり話をしなくなっている。子どもたちは本当に昔話を知らないので、教えていきたいという思いがあった。アイデンティティをもつ、自分の地元に誇り・愛着をもつ子供を育てたいという思いがある。

Q3 どうやって活動が広まったのか？

→読み聞かせをするとおじいちゃん世代に喜ばれる。さらに、同級生に見せるために学校で読み聞かせをした。また、お揃いのＴシャツを作ったり、読み聞かせのイベントをたくさんやったりして、人に触れる機会を作り、活動がさらに広まっていった。

Q4 過疎地域でイベントをつなぐとき、後継者がいないことが問題。「つなぐ」ということに関して、どのように考えているか？

→協力隊として赴任したが、過疎地域こそ十分つながりがあると感じる。あまり無理をしてつながり…と考えなくてもよいのでは。都会では人間関係の希薄さゆえに孤独死すらある。地元ではそれがない。死ぬまで現役という方もおられる。今は家の中におられる人を外に出す活動を考えている。町づくり学校や映画上映会等、家から出やすい状況を作ることが大事かと思う。

分散会５

司会者　川中　幸子
記録者　中井　佐衣子
会場責任者　鍵山　直人

前橋市生涯学習課（群馬県前橋市）

阿久津 哲也 氏

公民館における少年教室の果たす役割

前橋市では、M キッズサミットをはじめ、市内公民館で少年教室を開催している。学校ではなく、公民館において社会とのかかわりを体験しながら学習することで、子どもたち自身が主体的に考えるようになってほしいと願って活動している。中心市街地の空洞化や地域のつながりの希薄化への対策として始まった。中央公民館が核となって商店街を舞台に、NPO 教育支援協会北関東支部や前橋国際大学、中心商店街協同組合などと連携をして未来を生き抜く子どもたちの育成を目指して活動している。緊張から消極的な児童が多くいたが、「仕事」について体験的に考える様々なプロジェクトを通して、積極的な発言がかなり見られるようになってきた。スタッフとして参画している若者たちの基礎力の育成にもつながっているなど成果が表れてきている。

双海町こども教室（愛媛県双海町）

隅田 直軌 氏

わくわく生活体験「夕焼け村」

今年で１７年目を迎える通学合宿「夕焼け村」は、多くのボランティアスタッフの協力を得て開催しており、地域内の三つの小学校の４～６年生が６泊７日の日程で共同生活をする中で、青少年健全育成につなげることを目的としている。近年児童数の減少により、１学年１クラスという環境の中で固定化しがちな人間関係が課題となっており、また、小中学生の姿が見られない地区が少しずつ増加している。食事の準備や買い物、洗濯など、小学生が主役の集団生活を行い、「家族」を感じるプログラムや「ふるさと」を感じるプログラムなど、テーマを設定して実施している。夕焼け村には、中高大学生や地元婦人会等の様々な年齢のスタッフが関わり、参加児童のみならず参加するスタッフも含めて、地域の人々の交流にもつながっている。

愛媛おやじ会井戸端会議（愛媛県）

畝崎 優和 氏

伊台おやじの会発足について

小規模校の小学生と大規模校の小学生が一つの中学校に進学した際、小規模校出身の生徒が毎年のように不登校になるという現実から、何かできることはないかと「おやじの会」が発足した。両校には、以前それぞれに進学する中学校があったが今の中学校に統合した。１５年ほどもめ、統合するにあたりかなり苦労した過去があり、その頃のしこりがなかなかとれなかった。また、学校行事の中で両校の交流はあるものの、活動が小規模校の児童がお客さん状態になっているのではないかと考えた。中学校統合の際にもそこで、おやじの会で、小規模校を会場としたお泊まり会を実現させることができた。両校の児童が共に活動を重ねることで心の交流を深め、３年目から不登校がなくなるなど大きな成果として表れ、現在も活動は続いている。その他、地域と学校の潤滑油になったり、新たに引っ越してきた家族と仲良しになるお手伝いをしたりしながら「おやじの会活動」を積み重ねている。

質疑応答

群馬県前橋市生涯学習課（群馬県）

Q　課題解決型の活動は取組が難しい。公民館の体育行事や文化祭など、これまで行っている活動に加え、新たに社会のための活動を行うのは、業務のバランスを取るのが難しいのではないか。

A　人は増えないので、事業の中で調整を行ったり時期を変えたりしながら進めている。行政だけでは難しいので、NPO 団体などと協同的に行っている。また、公民館事業の見直しをしながら行っている。

Q　大学生の研修について

A　大学のほうで社会教育的な単位が認められている。単位を取るのが目的かなと思っていても、やってみるとおもしろくなってくるようで、細かい研修はやっていない。みなさんの意見を取り入れて良い方向に持って行く。年回５～６回の活動で進めている。

Q　小学生の募集について

３～６年の３０人程度で募集をかけてはいるが、比較的低学年の児童が多い。親のすすめから集まっているようだが、それもねらいの一つである。

Q　子どもたちの声から実現できたことはあるのか。

A　まだそこまではいっていない。子どもたちの素直な発想を大人たちが聞かなくてはいけない。子どもたちの率直な意見を大切にしていきたい。

Q　子どもの教育なのか、地域の活性化なのか、今後の展開について

A　横のつながりがあり、部局間との連携がとれる。地域の活性化をしていきながら、教育委員会の目的を達成していきたい。

Q　１６ある公民館の職員体制について

A　公民館主事１人と嘱託が４人～１０人以上、人口６～７万で公民館１館（職員が１０人）。活性化プログラムという国の委託事業でやっている。１６のうちの９館が市民サービスセンターに名称が変わっている。小さいことでやってみて評価されることや、アンテナを高くすることが公民館主事に求められている。

双海町こども教室（愛媛県伊予市）

Q　ホームシックやけんかなどが起こらないか

A　ホームシックもけんかもある。親が子どもに体験活動させたいという希望で申し込んだ事例もあり、本人は不安な様子だったが、同級生が支えてくれた。３日目くらいになると打ち解けてきて、最高の笑顔になった。子ども同士で仲よくなるようである。普段と違った環境の中で気分が高まりすぎてけんかにつながる。事情を聞き、仲直りできるよう解決する。また、時間が解決してくれることもある。

Q　予算はどこから出ているのか

A　参加費６０００円（参加者の食費）、社会教育課の予算で宿泊費（一泊１０００円）となっている。この行事の大切さを伝えて、活動を続けていけるようにしたい。

Q　メンバーは変わるのか、継続して参加する子どもはいるのか。

A　継続して来る子が多く、児童数の半分の子が参加している。３つの学校から参加していることも魅力の一つ。固定化された環境である中、３つの小学校の児童が交わりながら活動することは大変意味があり、３校の児童が同じ中学校に進学した際の人間関係にも影響しているようである。

Q　スタッフがいないからといって教員が出るとよくない。スタッフに教員は入っているのか。

A　こども教室実行委員会の中に教頭が入っているが、平日ということもあり夕焼け村の会場に教員はいない。夕食時には様子を見に来てくれる。主に東雲の学生さんや地元のジュニアリーダーがいてくれるなどしっかりした体制で行うことができている。公民館主事１年目でも、安心して活動できる。中高生のジュニアリーダーが小学生に与えている影響は大いにあり、６年生の感想の中には、来年はジュニアリーダーで参加したいというものもある。

Q　通学しながら合宿するのはなかなか大変なのではないか。

A　子どもに体験学習をさせたいという保護者もいるが、預かってもらっている間はゆっくりできるという意識の保護者もいて、考え方も様々である。

Q　常時子どもたちにかかわるスタッフは何人いるのか。

A　大人２人（公民館主事など）と大学生が宿泊。大学生は社会教育実習（単位とセット・前半５名、後半５名）夕方から学校に送り出すまでの時間がメインの活動になる。夕方には婦人会の３～４名が夕食の手伝いをしてくれる。

Q　学校の宿泊行事では、引率教員がなかなか寝られない学年もある。１週間も宿泊するのにご苦労もあるのではないか。

A　体調を崩す子もいる。毎朝の検温を行うなど、体調管理に気をつけて、学校とも情報交換しながら行っている。

○　自分の成長を意識させていくことができあがっている。子ども主体の活動を行う中で、ジュニアリーダーも育っている。何のためにしているのかが理解され、体制ができあがっている。ふるさと教育ができて、学校教育、３校同士の連携もうまくいく。単発の活動ではなく、１０年くらいのスパンで捉えて活動を進めていかないといけない。ふるさとがどれだけ子どもたちを抱え込んでいけるかが地域の教育力である。（若松さん）

愛媛おやじ会井戸端会議（愛媛県）

Q　お泊まり会自体はいつからスタートしたのか。

A　８年前から始めている。効果が表れ始めたのは３年目からである。

Q　時代の流れによって生じる問題があると思うが、今後の取組について。

A　まずは学校に出向いて学校の雰囲気などの現状を見る。また、おやじの会の活動についての話も校長の間で引き継ぎ、知ってもらえるようにしている。おやじの会を潤滑油として使ってもらいたい。教師の仕事は学力をあげること、地域のことはまかせておいてくれという気持ちで行っている。

Q　違う地域の知らない子どもたちのために熱くなることができる、その原動力はどこからくるのか。

A　自分が大きな団地に引っ越してきた際に感じたつらさ、克服した経験が原動力につながっている。

○　学校での子どもたち、地域の中での子どもたちを見て行かなくてはいけない。それぞれの立場、それぞれの役割で子どもたちにかかわっていき、足りないものは補い合いながら子どもたちを見守っていくことが大切。

○　教師や PTA と違う目線で見られる、違った形の行動力をもっているのがおやじの会のよさ。かなりのご苦労があったのが伝わってきた。貴重な話を聞かせていただき、胸が熱くなった。

○　大規模校と小規模校の子どもたちが中学校で一緒になると、同じような問題が起こることがある。中学校へ行って気後れしないように、活躍もできるようにと、様々な行事を年間を通して行っている地域があった。交流する際にはいろいろな配慮をして行っていた。不登校になると、人生が変わる。人間が変わる。大切な時期は取り返せない。このような取組を重ねていくことはとても大切である。

○　子どもたちは思っているより繊細で傷つきやすい。そのしんどさを大人がしっかりと理解し、手助けをしてくれる大人が地域にいることは幸せなことである。